

1.

ジェンダー研究所 2017(平成 29)年度 事業概要

ジェンダー研究所概要

2017 年度事業概要

▶ジェンダー研究所概要

進化を続ける日本のジェンダー研究の拠点

お茶の水女子大学ジェンダー研究所は、日本におけるジェンダー研究の国際的研究拠点として、国際的な学術ネットワークの構築を主要目的とし、高水準の国際的研究プロジェクトの実施、国際シンポジウム等の開催、国際的教育プログラムの実施、学術雑誌の刊行、研究教育成果のグローバルな発信と社会還元を推進している。

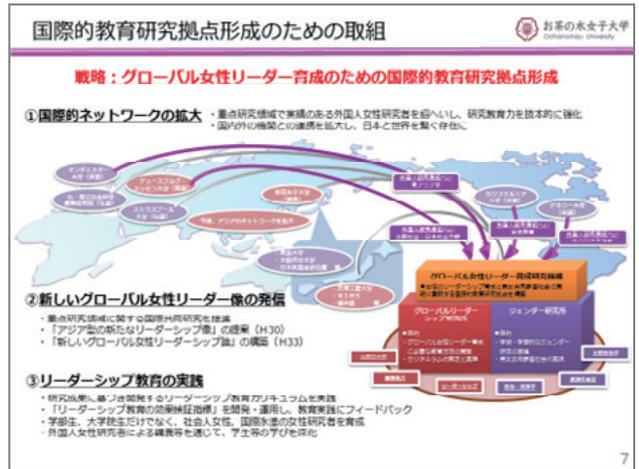
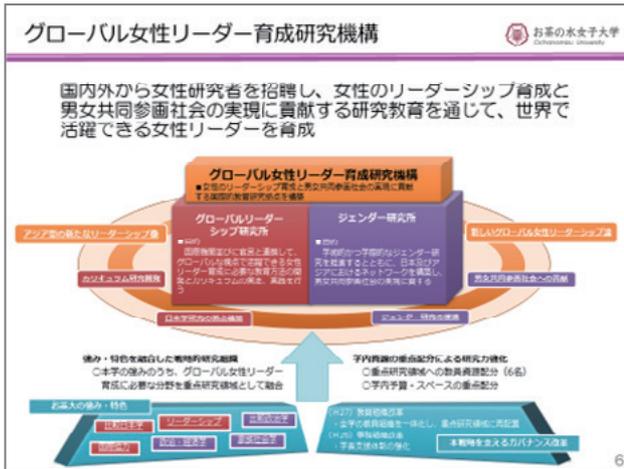
ジェンダー研究所の歴史は1975（昭和50）年設立の女性文化資料館に遡る。1986（昭和61）年に女性文化研究センターに改組され、1996（平成8）年には、国際的なジェンダー研究実施を目指すジェンダー研究センターとなった。2003年には21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア」が採択され、その成果の一環として、お茶の水女子大学大学院に博士前期課程ジェンダー社会科学専攻、博士後期課程ジェンダー学際研究専攻が設置されるなど、本学におけるジェンダー研究、ジェンダー研究教育の推進への貢献を重ねてきた。そして、お茶の水女子大学が創立140周年を迎えた2015（平成27）年、ジェンダー研究センターは「ジェンダー研究所」に改組され、「グローバルリーダーシップ研究所」と共に、「グローバル女性リーダー育成研究機構」構成研究所となった。

[参照:本報告書184～185ページ 資料⑥「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」]

ジェンダー研究所（Institute for Gender Studies (IGS)）の沿革と本学ジェンダー研究教育の動き

1875	東京女子師範学校（お茶の水女子大学の前身）開校
1949	お茶の水女子大学設立
1975	女性文化資料館設立
1986	女性文化研究センター設立
1993	大学院人間文化研究科博士後期課程人間発達学専攻「女性学講座」を創設
1996	ジェンダー研究センター（IGS）設立（国内大学初の「ジェンダー研究」を目的とする研究施設）
1997	大学院人間文化研究科博士前期課程発達社会科学専攻「開発・ジェンダー論コース」設置
1998	大学院人間文化研究科博士後期課程「女性学講座」を人間発達科学専攻「ジェンダー論講座」に改組
2003	21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア（F-GENS）」採択
2004	国立大学法人 お茶の水女子大学設立
2005	大学院人間文化研究科博士後期課程「ジェンダー学際研究専攻」設置
2006	大学院人間文化研究科博士前期課程「ジェンダー社会科学専攻」設置
2007	大学院人間文化研究科を人間文化創成科学研究科に改組
2015	グローバル女性リーダー育成研究機構 ジェンダー研究所設立

お茶の水女子大学は、2013（平成 25）年の国立大学のミッションの再定義にあたり、「グローバル女性リーダーの育成」を大学ミッションと設定した。グローバル女性リーダー育成研究機構は、そのミッション達成のための戦略的研究組織のひとつであり、国際的に活躍する女性リーダー育成のための国際的教育研究拠点形成を目標としている。ジェンダー研究所は、これまでに培ってきたジェンダー研究・教育および国際的学術ネットワーク構築の実績を資源に、グローバルリーダーシップ研究所と協働し、本学における女性のリーダーシップ育成と男女共同参画社会の実現に貢献する国際的研究拠点構築に務めている。



▶ジェンダー研究所 2017 年度事業概要

先端的ジェンダー研究の充実と国際的な発信へ

組織基盤づくりの初年、事業拡大の2年目に続く、改組後3年目の2017年度は、新規事業開拓の年であった。主な新規事業としては、1)『ジェンダー研究』の刷新、2) ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センターとの組織間連携、3) 研究所史料電子化プロジェクトの3つがある。

新規事業と並行して、研究プロジェクトやシンポジウム等開催といった事業も、これまでの2年間に引けを取らない充実ぶりで実施された。特任講師、特任リサーチフェローによるセミナーは、企画テーマも多様であり、聴衆の層も広げている。相当数のシンポジウムやセミナー運営の傍ら、研究プロジェクト成果の論文や学会報告による発表も、積極的に行われている。新たな外部資金の獲得もあった。研究面においても運営面においても、前年度までの2年間で下積みされたものから、着実に成果が挙げられており、それが組織力を向上させている。

また、2018年度に開催する「グローバル女性リーダー育成研究機構」主催シンポジウムの準備委員会では、「グローバルリーダーシップ研究所」との協働作業が進められている。

構成メンバー

事業活動の中心となる所長、専任教員、特任講師、特任リサーチフェロー、アカデミック・アシスタントの人数は前年体制継続。特任リサーチフェロー1名の異動により新規メンバーが参加し、研究プロジェクトに新たな分野が加わって、テーマ的な拡大が見られた。前年度末に任期を迎えていた所長および研究員人事も継続任命され、安定的な組織構成とチームワークが、事業活動拡充の重要な基盤となっている。特別招聘教授は、前年度からの継続1名と新規採用1名の計2名。それぞれの専門である歴史学および日本学におけるジェンダー研究の最先端の知見を紹介するセミナーや国際シンポジウム等の企画が提供された。日本学術振興会外国人研究員の継続受入1名は年度中に任期を終了したが、研究所所属研究者との共同研究が継続している。また、新たにハワイ大学大学院博士課程所属の国際交流基金フェローを、研究協力員として受け入れた。

今年度末を以て、当ジェンダー研究所および前身のジェンダー研究センターにおける研究教育事業に多大な貢献をした足立真理子教授が退官され、記念講演会が開催された。

[参照:本報告書 184～185 頁 資料⑥「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」
152～166 頁 資料①「構成メンバー」、13 頁「足立真理子教授退官記念講演開催報告」]

研究プロジェクト

研究所の柱となる研究プロジェクトは、5研究分野において行っている。(I)経済とジェンダー、(II)政治とジェンダー、(III)生殖とジェンダー、(IV)歴史・思想とジェンダー、(V)家族とジェンダーの各分野は、独自性を維持しながら有機的につながり、総合的な研究成果を達成することを目的としている。このプロジェクトの中で、2017年度は、科学研究費1件と、民間団体助成金1件の、合わせて2件の外部資金新規獲得があった。研究資金別にみると、IGS研究プロジェクトとして所属研究者それぞれが進めている共同研究・個人研究が6件、研究代表者または分担者として外部資金を獲得しての研究プロジェクトが8件、これに、2名の特別招聘教授それぞれのプロジェクトが加わり、合わせて16件となった。それぞれのプロジェクト活動をコアとした、研究会やシンポジウム開催への活動展開が活発に行われた。学会発表や投稿論文、書籍刊行による成果発信も積極的に進められている。

[参照:本報告書 15～40 頁「研究プロジェクト」]

国際シンポジウム等の開催

主催国際シンポジウム 4 件、国内シンポジウム 1 件、主催 IGS セミナー 14 件、共催・後援シンポジウム 3 件を開催した。IGS セミナーは、特任講師・リサーチフェローによる企画のものも多く、テーマやゲストスピーカーの顔ぶれは多様性に富んでいる。一覧からは、ジェンダー研究の学際性や、研究と社会のつながりのありようが見て取れる。また、学内外から相当の参加者数を得る成果を挙げている。

女性の政治参画や生殖医療、社会の独身化など多くの最新時事問題の議論が取り上げられたことに加え、本学生活社会科学研究会との共同開催のシンポジウムでは、本学における家計経済学領域の発芽とその後の発展の歴史が語られた。また、附属高等学校への後援イベントでは、高校生たちによる未来志向の、グローバルなジェンダー平等達成への意気込みを目にすることができた。このように、過去一現在一未来の連なりを感じる企画が並ぶのは、本学ならではの成果である。

シンポジウムやセミナーの開催は、研究発表や事業成果の社会還元のみならず、研究者同士の交流、共同研究機会の模索および研究ネットワーク拡充の機会ともなっており、2017 年度も国内外から 30 名を超えるゲストスピーカーを迎えて、活発な交流活動を展開することが出来た。

[参照:本報告書 45～99 頁「国際シンポジウム・セミナー」]

特別招聘教授プロジェクト

ラウラ・ネンツィ氏 (米・テネシー大学教授)、アネッテ・シャート＝ザイフェルト氏 (独・ハインリッヒ・ハイネ大学デュッセルドルフ教授) の 2 名を招聘した。特別招聘教授には、研究、教育、ネットワーク構築の面での、先進性および国際性の向上への寄与が期待されているが、両氏とも、その期待に十分に答える貢献をしてくれた。それぞれの研究成果に基づくセミナーや国際シンポジウム等の企画は、本学の院生や研究者たちに知的刺激を与えると同時に、多彩なゲストスピーカーや参加者同士の交流機会を提供している。本学博士後期課程院生が特別招聘教授のリサーチ・アシスタントを務める機会もあり、その教育的成果も大きい。

また、2017 年度後期には、2015 年度特別招聘教授のアン・ウォルソール氏が『ジェンダー研究』21 号に寄稿してくださった歴史分野の英語論文の、日本語訳作成作業があった。翻訳を担当したのはネンツィ氏の歴史学講義を受講した大学院生であり、ウォルソール氏と直接連絡を取りながら作業が進められた。このような、任期中に限らない教育成果や教員と院生の交流機会が得られていることを特記しておきたい。

[参照:本報告書 186 頁 資料⑦「国立大学法人お茶の水女子大学特別招聘教授に関する規則」および 101～109 頁「特別招聘教授プロジェクト」]

国際研究ネットワーク

前年度より継続されている研究連携関係からは、国際シンポジウムの開催や学会発表、論文執筆などの成果が挙がってきている。なかでも、申琪榮准教授が進めてきた、東アジアにおける女性の政治参画の国際比較研究では、共同研究者を招いての本学での国際シンポジウムや、韓国での国際シンポジウム開催があった。

新規の連携関係の構築も進められている。ノルウェー大使館の仲介で実現した、ノルウェー科学技術大学 (NTNU) のジェンダー研究センターの研究者を招いての国際シンポジウム開催は、その後、国際共同研究実施および研究助成金共同申請の協議が進められているほか、本学との大学間協定締結が実現している。

その他、セミナーやシンポジウムへのゲスト招聘などをきっかけにした、国内外の研究者や研究機関との連携・協力関係の構築にも努めている

[参照:本報告書 111～120 頁「国際研究ネットワーク」]

教育プロジェクト

例年同様、アジア工科大学院大学環境資源開発研究科「ジェンダーと開発」専攻との交換研修プログラム「AIT ワークショップ」と、所属教員による学部・大学院等での講義、特別招聘教授等による大学院生対象英語セミナーが実施された。

AIT ワークショッププログラムにおける AIT からの受入研修生は修士課程院生 1 名と博士課程院生 1 名の計 2 名であり、本学からの派遣は博士前期課程ジェンダー社会科学専攻院生 5 名であった。受入研修は、フィールドワーク方法論担当の大橋史恵氏、熊谷圭知教授（ジェンダー社会科学専攻）、棚橋訓教授（ジェンダー研究所研究員）の協力を得て、充実したプログラムとなり、かつ本学の他の院生との交流の機会も多く持つことが出来た。本学院生のタイ研修も、例年通り教育成果の高いプログラムであり、AIT の日下部教授からも、参加院生に対する称賛の言葉をいただいている。

ネンツィ特別招聘教授は、前年度後期に続き、2017 年度前期に大学院講義を担当し、英語による歴史学の講義を行った。また、AIT ワークショップは「国際社会ジェンダー論演習」の科目として実施されており、その担当である板井広明特任講師が本学の英語によるサマープログラムの講師も務めるなど、研究所所属教員は、学内各所において教育の国際化に貢献している。

[参照:本報告書 121～129 頁「教育プロジェクト」]

情報発信・社会還元

これまで年報としての役割も持っていた『ジェンダー研究』は、21 号から本格的な学術雑誌に刷新されることが決定し、2017 年度はその準備が進められた。新雑誌では、論文投稿資格がジェンダー研究所関係者に限らない一般に広げられ、世界各地からジェンダー研究の論文が投稿されてくることを期待している。構成、判型、デザイン、を一新した 21 号は、2018 年 6 月に刊行される。

文献収集・資料整理分野では、寄贈資料の受入のほか、所属研究者らの著書や、主催シンポジウムやセミナーの関連書籍の購入を進めた。大学附属図書館の改修があり、資料利用者には不自由をかけたと思われるが、2018 年度初めからは、増築されより便利になった図書館での文献閲覧が可能になる。また、新規に、ジェンダー研究所創立以来の事業記録の電子化プロジェクトが開始された。デジタルアーカイブの構築を目標としており、完成後には、本学における女性学・ジェンダー研究の歴史を一望できるようにする。

社会貢献の面では、一般公開のシンポジウム等開催による事業成果社会還元のほか、所属研究者は、行政機関や非営利団体からの講演依頼等を積極的に引き受け、各々の研究成果の社会還元に努めている。また、今年度は、第 20 回全国シェルターシンポジウム「No More Violence(ノーモア暴力)～DV・性被害・差別・貧困の根絶～」の後援をするという社会貢献の機会を得た。本学における DV 研究の実績が循環して、このような社会貢献が可能になったと理解している。

[参照:本報告書 131～136 頁「学術成果の発信」、137～140 頁「文献収集・資料整理・公開」、141～143 頁「ウェブサイトでの情報発信」、145～149 頁「社会貢献」]

▶足立眞理子教授退官

退官記念講演開催報告

批判理論としてのジェンダー研究

フェミニスト経済学の可能性を求めて

2017 年度末、足立眞理子教授が退官された。日本における女性学・ジェンダー研究の研究分野の設立と発展に尽力し、ジェンダー研究所において大きな研究成果をあげるとともに、日本のジェンダー研究の未来を担う人材を多数育成した。足立教授のもとで研鑽を積んだ若手研究者らが主催し、足立眞理子教授退官記念講演会が開催された。

【日時】2018 年 3 月 27 日（火）14:00～17:00

【会場】お茶の水女子大学共通講義棟 2 号館 101 室

【プログラム】

《第 1 部》足立眞理子教授講演

「批判理論としてのジェンダー研究：フェミニスト経済学の可能性を求めて」

《第 2 部》トークセッション「ジェンダー研究をどう創り出したか」

足立眞理子、伊藤るり、伊田久美子、上野千鶴子、大沢真理

《第 3 部》トークセッション「ジェンダー研究をどう継承していくか」

大橋史恵、奥村則子、落合恵美、長田華子、本山央子

【開催報告】

第 1 部は、日本フェミニスト経済学会の設立メンバーでもある足立教授が、従来の経済学体系を批判し、経済学をフェミニズムにより再概念化するという、「フェミニスト経済学」の成り立ちと理論的発展について解説する講演「批判理論としてのジェンダー研究：フェミニスト経済学の可能性を求めて」を行なった。

第 2 部のトークセッション「ジェンダー研究をどう創り出したか」では、足立氏と切磋琢磨しながら、日本におけるジェンダー研究分野の設立に尽力したベテラン研究者が肩を並べ、それぞれの足立氏との出会いのエピソードなどを交えながら、どのように、フェミニズムやジェンダー視点を取り入れた研究そして教育を発展させてきたかを振り返った。

第 3 部のトークセッション「ジェンダー研究をどう継承していくか」は、お茶の水女子大学出身の若手研究者たちが、これからのジェンダー研究を担う立場からの抱負を表明した。

客席には、多くの研究者や学生が駆け付けた。女性学・ジェンダー研究の先駆者であり、教育者である足立教授がこれまで積み重ねてきた実績が顕在化された、熱い思いに満ちた退官記念講演会であった。



(足立眞理子教授の業績については、本報告書 156 頁参照)